



汗まみれの制服
～肉欲リクルートスーツ～

K a i

小泉 朋子(コイズミ トモコ)、23歳ー。

都内の某女子大学を今年3月卒業したものの就職浪人となった彼女は、ため息まじりに公道を歩いていた。

「はぁ……」

彼女の身を包んでいる黒いリクルートスーツは、シワなどのくたびれ感が現れている。脚が棒になるほどあちこちを歩いてきたことで、タイトスカートの横ジワは特にひどい。

「はぁぁ……もう5社も落ちちゃったし……」

周囲の同年代の人間が就職し新社会人としてのステップを少しずつ歩み始めている中で、未だに就職ができずに不合格が続いている朋子は焦りを隠せない。

20歳のときに就職活動にと購入した黒いリクルートスーツが、ここまでクタクタに使い古した感が出ることなど、以前の彼女は想像もできなかった。

「でももう6月だし、就職は絶対にしなきゃ！」

気を取り直した朋子は、気持ちを新たに6社目の採用面接を受けようと、西新宿の高層オフィスビルへとやってきた。

「17階の株式会社ムラムラ・イノベーション……すごい会社名」

たった今から面接へ挑戦する会社の名前に驚きながらも、朋子は気合いを入れる意味で、両手で自らの顔を挟むように「パン」と叩いた。

約30分後ー

「小泉さん、小泉朋子さん。1番面接室へお入り下さい」

まるで病院の受付のように、朋子の名前が呼ばれた。

朋子は、白いブラウスが張る胸の中で高まってきた緊張をおさえるように、深呼吸を自らに施す。

「よしっ、行くわよ」

朋子は面接室のドアのノブに手をかける。

「失礼致します」

「どうぞ」

朋子の一言に対し、ドアの向こうの面接室の中から比較的若めの男性の声が優しく返ってきた。

それによって、緊張に満ちていた朋子の精神は、少し安定を取り戻す。

「失礼します」

朋子は改まるように面接室のドアを開いた。

すると、そこには黒とグレーのスーツをそれぞれ着用する20代後半～30歳ほどの若い男

性が二人座っていた。

「こ、小泉朋子と申します。よろしくお願ひ致しますっ」
緊張を隠せない朋子は、全身を硬直させながら二人の男性に挨拶をする。

「ようこそ。さ、そこの椅子に御着席下さい」
それを見つめる男性の一人が、彼女に着席をすすめる。

「失礼します」
朋子は、スカートの臀部のシワをのぼしながら、面接用の椅子に腰をゆっくりと下ろした。

「本日は面接によろしくお越しくございました。面接官を致します、佐々木に吉田です。よろしく申し上げます」
佐々木と名乗ったグレーストライプのスーツを着るあごヒゲの男性は、朋子に対してにっこりとほほ笑む。
もう一人の黒いスーツ姿の吉田という短髪のスポーツマン風の男性も、彼女に対して明るく笑みを浮かべている。

「さて、小泉さんの履歴書を拝見させていただきますね」
佐々木と吉田は、朋子の情報が記載された履歴書にざっと目を通す。

「なるほど、小泉さんは今年の春に大学を卒業されたばかりなんですね」
「は、はい」
佐々木が問うと、朋子は声から緊張感を抜けないまま答える。

「あまり緊張なさらなくて大丈夫ですよ。……失礼ですが、大学在学中に就職が決まらず、今に至るといえることですか」
「……はい」
「気を悪くされたらすみません。これまでにあなたが、どんな業種の会社さんの面接をされてきたのかはわかりませんが……弊社の営業職を希望したきっかけは？」
「は、はい。御社は女性下着を扱う中でも斬新な営業スタイルをとる新しいタイプの会社であり、若手の社員の意見も平等に取り入れて、会社と一緒に成長していけるという社風に惹かれました。それに……」
「それに？」

佐々木からの続く質問に、少し頬を赤らめる朋子は続けるように答えた。

「私自身が、体型の問題で下着に関して悩みがありまして……それに悩む女性が、少しでも色々な下着を身につけていただいて、楽しい毎日になれるように貢献したいと思っています……！」
「なるほど」

佐々木は頷くと、朋子の足のつま先から頭までを撫でるように見つめる。

「小泉さん」
「はい」
「あなたはぱっと見スタイルに関して悩みなどなさそうですね。むしろ、人一倍恵まれているタイプだと思います」
「そ、そんなことは」
「少し、テストをさせていただきますが、よろしいですか？」
「は、はい」
「では、まずその場に起立してください」

佐々木は、口元をニヤリとすると、椅子に腰をおろすリクルートスーツ姿の明子を立ちトが

朋子は、佐々木の指示のとおり何にも疑うことなくその場に立ち上がった。膝を見せていた黒いタイトスカートは、彼女が立ち上がったことにより再び膝頭を覆い隠す。

「フムフム」
佐々木は朋子の頭から黒い靴の足先までをざっと見渡すと、軽く2回うなづく。

「小泉さん、次はそのまま後ろへ振り返ってください」
「後ろへ？は、はい」
再度の佐々木の言葉通り、朋子は「回れ右」をするかのように後方へと全身を向けた。

「フムフム」
佐々木は、朋子の視線が自分自身から逸れていることを確認すると、自分の左横にいる吉田と視線を交わし、ニヤリと笑う。
吉田もそれに倣い、笑みを浮かべると、直ぐさまに朋子の後ろ姿に目をやる。

艶を放ちながらサラサラ揺れる黒いストレートの髪の毛、美しく描いた孤のようにクッキリとしたウエストのくびれ、丸みと膨らみがタイトスカートの横ジワを強調するヒップ、ベージュのストッキングに包まれた、引き締まったふくらはぎ。

佐々木と吉田の二人の目には、朋子の後ろ姿をすでに罨にかかった獲物のように見えていた。

「フフッ、ここまでだけでも想像以上だ」
吉田は笑みとともに喜びの言葉をこぼした。

「小泉さん」
今度は、吉田が朋子に声をかける。

「は、はいっ」
「こちらに再び身体を向けて椅子におかけください」
緊張感のまだ解けない朋子は、吉田の言葉に従い再び全身を佐々木達への方向へと向け着席する。

「小泉さん」
「はい」
再び口を開いた佐々木に対し、朋子は相槌をうつ。

「私達は……我社は見ての通りまだ若いですが、女性用下着を主に取り扱う新進気鋭をモットーに成長していこうとしている会社です。あなたは、我社の力になれますか？」

「そ、それはぜひ」
「フム。ですが小泉さん、履歴書を拝見する限り今年新卒のあなたが、この初夏の時点で就活をされているということは……その受けてきた数社とたまたま縁がなかったのか。はたまた数社から受け入れられないほど能力が欠如しているかのいずれかの場合であるかと思えます」
「そ、それは……」

冷静なまでの佐々木の言葉に、朋子は言葉を失う。
佐々木は続けた。

「小泉さん、あなたは我社での企画営業を希望とのことだが、精神的にタフであり尚且つ向上心がなければ、我社でのどの仕事もつとまりません。そんないつまでもガチガチに緊張してばかりの状態、仕事がつとまるとは思わないのですが……どうなんですか？」
「わ、私は……」

朋子は、一旦息を呑むと、口を開いた。

「き、緊張ばかりしてしまい申し訳ありません。ただ、私はこちらで会社の成長にしっかりと貢献できるように、自分自身を社会人として成長させ、どんな大変なことでも何でも頑張っていく所存です」

「ほう……どんな大変なこと、でも頑張ると」

「はい！もう緊張は過剰にしないように気をつけていくことを努力致します」

「なるほど。再度お聞きしますが、『何でも頑張る』という言葉に嘘はないんですね？」

「はいっ！」

朋子の強い返事を改めて確認した佐々木は、俯きながら口元をニヤリとさせる。

「わかりました小泉さん。あなたの熱意を、今から30分ほどの『最終テスト』で試させていただきます、それがクリアできたら我社の正社員としてお迎え致します」

『正社員として』という希望的観測を秘めた言葉に、朋子の緊張感と焦りに充ちていた心は、複雑に絡み合った糸が鮮やかに解けたように開かれていく。
そこに、吉田が言葉を続ける。

「では小泉さん、最終テストを今すぐここで受けられますか？それであれば、最初のこの『テスト』は通過です」
その言葉に、朋子は迷うことなく「はい」と首を縦に振った。

「よろしい。では、私達二人との最終テストに入ります。小泉さん、こちらに来て下さい」
佐々木のその言葉通り、椅子から再び立ち上がった朋子は二人に一步一步と歩み寄る。
そして、面接官である彼らのデスクの前にピタリと止まった。

就活生とは思えぬほどのシワでくたびれた黒いリクルートスーツを身にまとった朋子の全身を、佐々木と吉田は改めてまじまじと見つめる。

そして、彼らは席を立ち上がり、彼女を挟むように両サイドにそれぞれ歩み寄った。

「あの……最終テストって」
朋子が不安そうに尋ねると、彼女の右側面に立ち肩に手を置く面接官の佐々木はニコリと微笑む。

「小泉さん、就職活動で動きっぱなしのせいかな、せっかくのスーツがやつれてるね」
「あっ」
「仕事でスーツを着るならもう少しピシッとしないと」
「も、申し訳ありません……」
「ジャケットもシャツも、スカートなんて特に横シワがひどい。この間までJDだったとは思えないな」

ここで、朋子は一抔の違和感を覚える。
気がつくと、彼女の左側面に立つ副面接官の吉田も微笑んでいた。

「じゃ、JD……？」
「女子大生の略だよ。就活がうまくいった女の子はこんなにリクルートスーツを使い込まないものだ」
「その……就職活動で歩き回ったものですか」
「本当にそうか？」
「えっ？」
「この黒いリクルートスーツを違うことに使っていたんじゃないのかい？」

佐々木は朋子の右肩に置いた自らの左手を、彼女の腕からウエストの部分へと移動させていく。

「ち、違うことって……」
「例えば、彼氏の前で着てくれと言われたとかね」
「そ……」

朋子の身体は一瞬にして固まった。
佐々木と吉田は笑いシワの生じる顔をさらにニヤリとさせる。

「おやおや、本当に彼氏との逢瀬のために着たのかい？このリクルートスーツを。就職活動の武器である、今日の面接のための神聖なこのリクルートスーツを、君はまさかそのために使っていたのかい？」
「えっと……」

朋子は何も言い出せなくなり、口ごもる。
佐々木は続けた。

「さぞや盛りトがったことだろう。でないと、そんなにこの黒いスカートがシワになるはず

がない！」

佐々木は、朋子のくびれたジャケットごしのウエストから丸みを帯びたスカートのヒップラインへと手を移した。

「あっ……何を」

朋子が身体をビクンとさせると、吉田が彼女の左肩と左腕をガッシリとつかみ、口を開く。

「動かないで。最終テスト中ですよ。佐々木さん、いかがですか？」

吉田が尋ねると、佐々木は何か満足したかのように首を何度か縦に振る。

「いいよ、いいねえ小泉さん。我がムラムラ・イノベーションに勤める女性社員は、まずスーツ姿はもちろん下着姿が艶やかでなければいかん。イロイロとチェックしせてもらうよ」
「あ、あの……あっ」

気がつくともう手遅れだった。
次第に呼吸を荒げはじめていた佐々木と吉田は、自らの身体と朋子との距離を零にしようとしていた。
二人の手は肩や腕だけではなく、背中や臀部にまでのばされていく。

「いやあ、いいねえこのスーツ！就活生というのに社会人のような使用感があり、若い女の子特有の匂いまで染み込んでいる」
「ええ、まるで3年間着用した女子高生の制服のようですね佐々木さん。いいエキスが染み込んでます」

佐々木と吉田、二人の会話が常軌から逸脱していることは、自らの身体に触れる手があることで朋子は本能で理解していた。

「あの……やめてください……あっ」
朋子は抵抗するが、佐々木にバストの先端を白いブラウス越しにつままれ、反応してしまう。

「なるほど、ここがまず一つ目の弱点のわけか」
「あっ……」
「この白いシャツパンパンに張ってるな。さてジャケットのボタンをはずしていただくか」

佐々木がそう促すと、朋子はうっすらと開けた瞳で彼を見る。

「あの……これって……」
「最終面接テストですよ。これが通ればあなたは我社の『正社員』なんですよ」
じれったくなった佐々木は、顔を動かし吉田にボタン外しを促す。
吉田はそれにならう。

「あっ……」
スーツのジャケットのボタンが外され、その奥の白いブラウスが形作る豊満な丸みを帯びた突起が現れる。

「おお～」
吉田は思わず声を上げた。

「いやーいいねえ小泉さん。これなら営業先でもウケちゃうねえ」
ついに、佐々木は今にも張って破裂しそうな朋子の白いブラウスの右胸の部分を右手で包み込んでいく。

「あ、あぁっ……」

「あれ、小泉さん変な声が漏れてるよ」
吉田も、彼女の左側の胸を手で揺さ振りをかけていく。

「あっ、あっ……」
「いやーいいねえ、シャツがパンパンに破裂するほどのこのバスト！お得意様の男の担当さん喜ぶなあ！」

ブラウスごしに胸を撫で回され、朋子の身体は拒否反応を示しながらも恋人との営みのときのような熱いものが芽生え始めていた。

「うーん、シャツもいい匂いだ……。さてスカートはどうかな」
「あっ……その……」
「さぞ歩いて汗や下半身のエキスが染み込んでいるんだろう。えっ？」

佐々木は踵をおろし、硬直しながら立っている朋子の黒いタイトスカートをあらゆる角度か

は、半信半疑とばかり、膝をひたすら叩きつづけて、お加の黒いスカートから取り出す月夜から撫で回し、匂いを嗅ぎはじめた。

「あっ……あ……」

上半身に続いて、佐々木と吉田からタイトスカートが包む下半身を撫で回されていく朋子は、硬直した身体の奥から振り絞るように声を漏らす。

「や、やめて……ください……」

「ん、何だい？」

「お願いします……や、やめ……て……あっ」

「身体は緊張してるけど抵抗してないし、息が荒くなってきてるじゃないか、小泉さん」

佐々木は気にもとめず、豊満に膨らんだ臀部を嗅ぎながらまさぐっていく。

「うん、若い女の子の下半身のエキスがたっぷりと染み込んだ、いい匂いだ。表でこうなんだから、内側はもっとすごいんだろう」

「ええ、梅雨時ですからきっとスカートの中は匂いと汗で蒸れてますよ」

タイトスカートからスラリと伸びる朋子のベージュ色のふくらはぎにも手をのばしながら、佐々木と吉田は嬉しそうに膝丈のスカートを上に捲くり上げる。

「きゃっ」

朋子は同級生から悪戯をされた少女のような小さな悲鳴をあげた。

「なに、どうしたの小泉さん。スカートめくりは初めてなわけじゃないでしょ？高校のころとか放課後に彼氏にされてきたでしょ？」

黒いスカートを腿のあたりまで捲くっている吉田は、舌なめずりをしながら立ちすくむ朋子の顔を見上げる。

朋子は捲かれたスカートを元の膝丈に戻そうとするが、男性二人の力により跳ね返されてしまう。

「おっ、おっ。細すぎず、且つ引き締まったいい太ももだねえ。会社員にしておくにはもったいないほどだ」

ベージュ色のストッキングに包まれた太ももから繋がるふくらはぎや足首にかけて、朋子の脚は美しいラインを形作っている。

「いやーいい美脚だ。しかもスカート捲くったら、いい匂いがフワツとしてきた」
佐々木と吉田は、捲くったスカートの内側を犬のようにクンクンと嗅いでいく。
そして、黒い光沢を放つピラピラとした裏地をペロリと舌をなぞらせた。

「うーん、若い女の子の下半身のエキスの味だ。アラサーの女の匂いや味よりフレッシュな感じがするのが堪らないな」

「そうですね佐々木さん！てかそれって、彼女さんと比べてたりしてますよね。あんなに美人な彼女さんと」

「ばれたか」

佐々木と吉田は、ニヤつきながら顔を見合わせる。

そして、タイトスカートが裏返しになるほど思いきり捲くりあげた。

「きゃん！」

朋子の悲鳴もむなしく、これまでスカートに隠されていた美脚の根元の部分が姿を現した。ベージュのストッキングにカモフラージュされた奥に、薄紫色の光沢を持つシャープなトライアングル形が露になった。

「うおっ」

吉田は思わず声をあげた。

「大人しい、真面目そうな顔をしてるのに、下着は地味じゃないんだな。今どきの女の子のこうゆうギャップは本当に堪らないな。どれどれ」

佐々木は、太ももや根元を撫で回しながら、スカートの裏地を舐めていた舌をストッキング部分に移していく。

テロテロとした舌触りから一転、僅かにザラザラとした感触が舌に伝う。

「うーん、甘いし香ばしいし、この絶妙に使用感のある感じがまた良いな！」

「あっ……あああっ」

空腹で貪る獣のような佐々木たちの舌に、朋子は無抵抗のまま吐息まじりの声を漏らしていく。

「あれっ、小泉さん何を変な声を出しているんだ、神聖なオフィスで。これだから最近の若い女の子は股がゆるくてけしからん」

「す、すみません……」

「すみませんじゃない、ちょっと身体を触っただけでいやらしい悲鳴を上げやがって。こんなんで正社員になれると思ってるのか」

「そ、そんな……」

「この程度に耐えられないなら、当社で正社員に採用するのは難しいな」

スカートを捲かれた下半身をまさぐられ続けている朋子は、「正社員」という単語を聞きハッとした。

『そうだ……私は一日も早く就職して、家族を安心させなきゃいけないんだわ……』

大学卒業からの新卒として周囲が新しい気持ちで社会人として巣立っていく焦りも重なり、下半身を弄られる朋子は冷静に我に返る。

『ここでチャンスを逃したらダメだわ……何が何でも就職しなきゃ……』

朋子は、元の膝丈に戻そうとしていたスカートへの手をスッと離れた。

「おっ、どうしたの小泉さん」

「私の……リクルートスーツの姿がそんなにお気に召したんですよね」

「ああ、そうだ」

「佐々木さん……私どんなこともします、この私を味わってください……だから、私を採用してください。お願いします……！」

朋子は、佐々木と吉田の手の指先を掴み、自らの下半身の根元へと招き、密着させた。

「この私を味わってください……とな」

朋子からの意外な反応に、佐々木はポカンとする。

「小泉さん、君は勘違いしてるようだね」

「えっ」

「これはテストと言ったはずだ、どうするかは私たちが決めることであって、君がどうしてくれなどと決めることではないだろう」

「そ、それは……」

スカートを捲くられてストッキング越しの下着を露にする朋子は、そのまま立ちすくんだ。佐々木は続けた。

「もしかして君は、どこぞの裏口入社や入学のように、カラダを相手に差し出せば思う通りになるとでも思っていたんじゃないのか？」

朋子の胸の中の脈は、強くドクンと鳴らした。

「そ、そんなことは……私は……」

「私を味わってくださいなどと、普通の女子ならそんなことは絶対に口にしないと思うがね。私と吉田は社員としての適性をはかろうとしただけであるし、君は何だと思っていたんだ。男はカラダを差し出せば何とでもなると思ったのか？」

佐々木の言葉にカラダの力が抜けるように、スカートを捲くったままの状態ですくもろから床に崩れ落ちる朋子。

そして、目に大粒の涙を溜める。

「わ、私は……そんなつもりじゃ……」

「そんなつもりじゃなかったら、何だと言うんだい？そんなんじゃ最終テストは中止だなあ」

「あの……えっと、そんな……」

朋子の目に溜まった涙は、ポロポロとこぼれ落ち、ファンデーションがコーティングした頬を伝う。

ファンデーションの上に涙の跡をつくった滴は、彼女の膝やスカートに落下していた。

「申し訳ありません……私は、私は……」

「まあ、君の今からの心構え次第でテストを続行しないでもない」

「ほ、ホントですか」

床にへこたれた朋子は、藁にでもすがる気持ちになり、佐々木の顔を見上げる。

「ああ。君がこれからテストが終わるまで『何があっても』さっきみたいに意見や口答えをしないことだ。いいかな？」

「は、はいっ」

「そうか、それならテストは続行だ」

「あ、ありがとうございます」

佐々木の許しの言葉に、朋子は泣き声でホッと胸を撫で下ろした。

「さて、テストを続行だが……吉田、いいかな？」

「はい、いつでも大丈夫です、佐々木さん」

佐々木とアイコンタクトを合わせた吉田は、床にへこたれた朋子の横に白いきれいな布地のマットレスを敷きはじめた。

「さっ、小泉さんはそのマットの上に」

吉田の指示で、朋子は床に敷いた白いその上に移動し再び座る。

「あの、これから何を」

「うん、こういうことだ」

すると、朋子の正面にきた佐々木は、彼女を正面から押し倒しマットレスの上に仰向けにした。

「きゃっ」

軽い悲鳴とともに、捲くれた黒いタイトスカートとストッキング越しのスラリとした細長い脚がより一層彼らの目に留まる。

「な、何を」

「言ったね、口答えはもうしないと」

その時、もう遅かった。

吉田は謀ったように仰向けになった朋子の上半身を両手で押さえ付け、それと同時に佐々木はスカートが捲くり上がった彼女の下半身に手をやっていた。

そして、薄紫色の下着をぼんやりと映すベージュのストッキングをギュッと掴む。

「えっ……！？」

朋子がそう叫んだとき、「ビリビリ」という破裂音が鈍く室内に響く。

朋子の下半身の根元を包んでいたストッキングは破裂音とともに亀裂を生み、それまで隠されていた白い肌と下着を現した。

「いやー、ストッキングを破くのはいつも堪らないなあ。おっ、ストッキング破った途端またいやらしい蒸れた匂いが」

裂け目に顔を近づける佐々木は、薄紫色の布地に右手の中指を触れる。

「ん？」

「どうしました、佐々木さん」

「実はまさかもうこんな……」

佐々木はニヤリとし、舌なめずりをする。

そして、再び右手の中指を下着布地の中心に接触すると、「ネチヨ」という音が微かになる

。

「あぁっ……」

朋子はカラダをビクンとさせながら声をもらす。

「小泉さん、何だいこれは」

「こ、これは……」

「下着をこんなに汁でびしょ濡れにするほど、我々は何かをした覚えはないぞ」

「し、汁だなんて……」

「指先で弄ってほしいのか？」

「あ……あ……」

「それにしてもすごい汁の量だ、この地味なリクルートスーツの奥で一体何を考えているんだ」

そこで、佐々木はジャケットのポケットから一本の白いストローを取り出した。

そして、その先端を指を触れていた部分に近づける。

「さて」

「えっ……あっ……」

「そんなに濡れてるなら、これで吸い取ってやろう」

「そ、そんな……あぁっ！」

これまで体感したことのない刺激とわずかな痛痒みに、マットレスの上で仰向けになる朋子はカラダをビクンと大きくしならせる。

「どれどれ」

佐々木は、開いた朋子の股間に口にくわえた白いストローを差し込み、そのままジュースでも飲むかのように息を吸い込んでいく。

「んー、んー」

「どうですか、佐々木さん」

「吉田、思った通り……いや、想像以上の濡れだ。多量の汁が溢れ出ている」

「そうですか！そして、味は？」

吉田のその質問に対し、佐々木は一旦答えることなくストローの中を通る透明な液体を力強い呼吸で吸い込み始める。

そのたびに、「ジュルッ、ジュルッ」と液体が弾けるような音がストローを通して鳴っていた。

「あ、あぁっ！」

捲くれたタイトスカートの奥にストローを突き込まれた朋子は、上半身を吉田に押さえ付けられながらもカラダをよじらせていく。

「うん、甘酸っぱい。なんて若々しく美味な汁なんだ！しかもこんなに出しやがって」

「あ、あぁっ……」

「吉田、君も味わってみろ」

佐々木は、続いて吉田に朋子の下着をびしょ濡れにした原因の汁を味わうように促す。

吉田はニヤリとしながら、ポケットから自分自身用の白いストローを取り出した。

それまで佐々木がいたポジションに吉田が移り、引き続き同じように彼女の下半身の奥にストローの先端を「ネチョリ」と差し込む。

「本当だ、甘酸っぱいやらしい味と匂いの汁だ。スカートを捲くったりストッキングを破いたときに瞬間ムワッと嗅いだ匂いの原因はこの汁だったんだな」

「ああああっ……」

助けを求める悲鳴のような朋子の

声は、面接室に虚しく響く。

そして、佐々木は今度は彼女のジャケットの下に着ている白いブラウスの胸元に手をやる。

「うーん、なんとも豊満な胸を包む使用感のあるブラウスだ。うん、何とも言い難いくらい君の匂いが染み込んでいるな、小泉さん」

佐々木はテントのようにパンパンに張り詰めた白いブラウスのボタンを下二つを残し全て取り外した。

すると、スカートの奥に見えたものと同じ薄紫色のブラジャーが二つの大きな丸みのある突起を包んだ状態で姿を現した。

「い、いやあ……」

「いやいや、下半身だけでなく上半身もなんともいやらしいな、君は」

「ああああっ……」

「こうやってフェロモンを振り撒けば就職なんて受かるとか浅はかな考えをしていたんだろう、君は！えっ？」

「そ、そんな……」

佐々木は上半身までもが露になりはじめた朋子の胸をまさぐり、ブラジャーをぐいっと下に下げた。

すると、ブラジャーに隠れていた部分もついに露出し、濃いピンク色をした小さな突起物がちょこんと左右ともに姿を現した。

それを見た佐々木と、ストローで下半身の汁を吸い込み続ける吉田は一層ニヤリと微笑む。

「これだ……これだあ！」

次第に呼吸を荒げていく佐々木は、現れた左右に一つずつの乳房を掴み、まずは向かって左側にある可愛らしい突起物に涎とともに口を密着させた。

口に溜まった涎が下とともに先端部に絡み、丸みをもった果実は男臭い汁気を帯びていく。

「あっ、あっ……ああっ……！」

二人の男性面接官から上半身と下半身のそれぞれを押しえ付けられ貪られていく朋子は、抵抗することなくカラダをビクンと反応させ、甲高い悲鳴のようなメロディーをさりに掻き鳴らしていた。

「うん……何て甘くて柔らかくいやらしい味の胸なんだ。こいつめ！」

「佐々木さん……佐々木が乳首を舐めてるおかげか、こっちはさらに濡れてきてます。ストローで吸いきれないくらいどんどん垂れて、ついにお尻のこのスカートの裾まで染み込んでびしょ濡れにしています」

「そうか……」

佐々木は勝ち誇ったようにニヤリとすると、涎だらけのピンク色の乳首を白いブラウスで一

且隠し、その上から再び貪りつく。

「あっ……！」

「ん〜〜〜……甘い！甘い甘い甘い！！この就活でくたびれて使用感満載のブラウス越しにしゃぶり透けるのもまた最高だ！！胸の旨味とブラウスに染み込んだエキスが同時に味わえてたまらん！！」

「佐々木さん僕も……もうストローじゃ物足りなくなったので……」

吉田は、ついに下着の奥の果汁の出所の豆のような柔らかい突起を指で弄り、舌の先端をピロピロと上下させていた。

「いやっ、あっ、ああっ……」

「いいねー小泉さん、君の汁は無制限で出てくるのか」

ブラウスごしにバストを貪る佐々木。

破れたストッキングの奥の、メスの果汁が溢れる部分を舌と指で縦横無尽に激しく突く吉田。

上半身と過半数を同時に弄ばれる無抵抗な朋子は、自らの汁のように溢れる羞恥心と快感に心身を預けるしかできなかった。

そして、佐々木はポケットから手の平サイズの白い円柱状ボトルを取り出した。

「このスーツ姿をしたメスめ、ローション漬けにしてやる」

「口、ローション……??」

悶えて息絶え絶えのまま仰向けになっている朋子は、不適な笑みの佐々木と吉田を交互に見る。

すると、彼女の上半身を攻めていた佐々木の右手には、白い円柱状のボトルの存在があった。

白くも半透明なボトルには、ハチミツのようにネットとボトル内を揺れる液体のような物質が確認された。

「そ、それは……」

「小泉さん、君もその若さとはいえ何となくは知っているだろう？オトナが使うおもちゃの一つだよ。カラダに……特に、制服やコスチュームで遊ぶときなどは、さらにエキサイトするのさ」

佐々木は楽しそうにローションの透けるボトルを見つめながら朋子に語りかける。

「そ、そんな……それをまさか」

「そう、君のその使用感たっぷりの黒いリクルートスーツにかけるのさ」

「えっ……??」

「ブラウスに、スカートに、ストッキングに、カラダに、この透明なヌメヌメとする液体を塗ってあげるよ！」

すると、佐々木はボトルのフタをとり、本体を指で押しながら逆さにしていく。

出し口の先端から、透明なハチミツのような液体が顔を出す。

「や、やめて……」

「うるさい、黙りなさい」

「ああっ！」

抵抗する朋子を、吉田は舌の先端と指先で彼女の下の口を弄り黙らせた。

「ああっ、あああっ」

「口では抵抗するくせに、カラダは正直だな君は」

「うっ、ああっ」

「昼からこんなに汁を出して、はずかしくないのか？」

「は、恥ずかしいです……」

「うそつけ」

すると、吉田は自らの右手の人差し指と中指を同時に割れ目に入れ、急激に掻き回し始めた。

「ああああっ！！」

甲高い快感の悲鳴が、「チャプチャプ」と液体の飛び散る音とともに佐々木と吉田の耳に心地よく留まる。

「まったく、スキモノのくせに」

「あ……ああっ……」

「佐々木さん、今です」

吉田に促され、佐々木はボトルを押す指の力を強めた。

そして、逆さにしたボトルからはネットリとした液体の大きな雫が粘りとともに落下し、朋子の胸の谷間を包む白いブラウスへと直撃した。

「あっ……」

「ホラホラ、ホラホラ。塗ってくよ小泉さん」

佐々木は次々と彼女の胸に落下していくローションをブラウスごと塗りたくり、ひろげていく。

彼女の上半身を包む白いブラウスは、透けて下着や肌の色すら露出していく。

「いやーいいねえ！君のエキスタっぷりの白いブラウスがどんどん透けて侵されていくよ」
胸の部分を撫で回すと、ネチヨリネチヨリと音と感触が佐々木の脳をさらに興奮させる。
撫で回す勢いで、ブラウスの上に羽織る黒いジャケットまでがベッチヨリと染み込んでいった。

「ほら小泉さん、気持ちいいだろ？」

「ああああっ……」

「気持ちいいと言いなさい、えっ？」

「き、気持ちいいです……」

「どのくらい気持ちいいんだ？」

「い、いっぱいです……」

「聞こえない」

「い、いっぱい……すごく気持ちいいですう……」

「そうかそうか」

機嫌をよくした佐々木は、上半身に落としたローションの次の矛先を下半身に向ける。

「次は上半身よりいやらしいエキスタっぷりのそのタイトスカートに染み込ませてやる」

「えっ？あっ」

朋子が気づいたときには遅かった。

捲かれてシワが張り細長い脚を露出させているスカートに、水飴のようにネットリとした透明なローションが、ジンワリとぬめりながら広がっていく。

「ホラホラホラー汚してやるぞー！！メスの下半身のエキスタっぷりのスカートにローションでさらに濡れるんだー！」

黒のリクルートスーツがベチヨベチヨにぬめっていくことに、佐々木は視界的な快楽と興奮の極みを覚えていた。

「ああああっ……」

就活のためにこれまで何社にも渡り歩くために着込んできたリクルートスーツが、初対面の男性二人に汚され蹂躪されている事実、朋子は力無い悲鳴を上げることしかできず無抵抗にその乱れたカラダを露出していた。

そして、スカートのみならず裂かれたストッキングや下着にまでローションは侵食する。

「あぁっ、佐々木さん、俺もう限界です！早くぶち込みたいです！」

「まぁ、待て。この子を立ち上がらせて二人で両方の口を塞ぐ」

「おっ、いいですねえ！もう抵抗する力もないようですし。ほら、立って小泉さん」

吉田に促され、グッタリとマットレスに横たわる朋子は重そうなローションまみれのカラダを必死に起こした。

「ううっ……」

「ほら、早く」

「……！」

カラダを起こし立ち上がった汁まみれのスーツを着た朋子は、目の前を見て驚いた。

そこには、スーツのズボンのベルトとホックをいつの間にか外して「ある物」を露出する佐々木の姿があった。

「きやっ」

突然のことに、朋子は顔をそらした。

彼女の目の前では、仁王立ちする佐々木が自らのズボンのベルトとホックを解き、そこから少し黒ずんだ棒状の固形物を露出していた。

露出した「それ」は硬い金属の芯でも入っているかのようにカチカチに膨張し、先端が天井に向いている。

「小泉さん、何を驚いているんだ？」

「だって……その……」

「ああ、今僕が出したこいつのことか。君が若いとはいえ、まだ見たことがないわけではないだろう？」

「え……あ……」

「見たことくらいあるだろう？高校くらいのときから、彼氏のも。いや、見ただけではないな」

すると

佐々木は、左手の指先で朋子の顔の左右の頬を軽く挟んだ。

「な、何を……」

「この口に、口の中に……含んだことくらいあるんだらうに」

ニヤリとした佐々木は、膨張したそれを朋子の目の前に突き付ける。

「きやっ！」

「何を驚いているんだ、本当は見るのも触るのも好きなくせに」

「そ……そんなことは……」

「嘘をつくな、スキモノが。ローションをかける前から下の口はびしょ濡れだったろうが。それは何なんだ、ん？」

「そ、それは……あぁっ！」

カラダを大袈裟なまでに反応させる朋子の下の口に、吉田が二本の指を入れる。

そのたびに、「グチヨリ」と蜜が飛び散るような音が鳴る。

「あああ……」

「佐々木さんに逆らうな。このスキモノ奴隷が」

「あうう……」

「ほら、目の前にあるものを触って口に含んで差し上げるんだ」

「で、でも……」

すると、ここで佐々木と吉田はため息をつく。

「別にいいんだよ？今回の面接はなかったことにして、このままもお帰りいただいても」

「そ、そんな……」

「君も素直になりなさい、小泉さん。メスの本能の赴くままに、したいことを素直にすればいいのだから」

「……」

「さあ、早く口でペロペロとしなさい。これもテストなんだよ」

朋子は、カチカチに膨張している佐々木の黒ずんだ「それ」を見つめる。

両手を近づけ、大切なペットの頭でも撫でるように、まずは指先で触っていく。

「あーいいねえ、初めてじゃない手慣れた感じだな」

「そ、そんな」

「小泉さん、これまでどれくらいの男性経験があるんだ？」

「そ、そんなことは……」

僅かに臭いが漂うソレから朋子は目を背けようとするが、佐々木に頭を手でつかまれる。

「ほら、触るだけじゃダメだ。そのいやらしい口の中に入れて舐めてみなさい」

「え……」

「嫌なのか？これも内定に響くテストだというのに」

「……」

「ほら小泉さん、どうせこれまで何本も何十本も口に含んできたんだろ？だったらしなさい、さあ早く」

朋子は顔をしかめるも、「内定」という呪文のような言葉の力には敵わず、佐々木の下半身からそびえる肉塊に徐々に口を近づけた。

そして、口をO形に開き、先端からゆっくりと見ずからの口の中に招き入れる。

「おっ……おおっ」

朋子の口内に下半身の先端を吸い込まれた佐々木は、声を漏らしながら悶える。

「ああー……いつもながら、この舐められ始める感じが堪らないんだよなあ。若い女の生暖かい息遣いが直にココに感じるぜ」

「うん……うっ」

「ほら小泉さん、ちゃんと奥まで含んで舌も使ってね」

「は、あい」

口に含んでいるため上手く喋ることができない朋子は、口に溢れる涎を啜りながら返事をする。

次第に彼女の口の間隙からは、溜まった唾液が隙間から下には落ち、自らの膝やローションまみれのスカートに滴り落ちた。

「んー、いいねえ舌使いが。小泉さん、やっぱりスキモノだね」

「……」

「そのまま上目遣いで私を見たまえ」

頷いた朋子は、佐々木の肉棒を口の中で唾液とともに上下左右に弄り尽くしながら彼の顔を見上げる。

ハッキリとした二重瞼が形作る瞳が見上げたとき、佐々木の支配欲と自尊心はさらに高まっていった。

「いやー、いいねえ。もう完全に硬くなっちゃったよ。そろそろ……下の口にもしてしまおうかな」

「そうですね佐々木さん。僕もそのいやらしい口に舐められたいです」

「よし、次は君が舐めていただきなさい吉田。僕はもう我慢できそうにないから……ほら小泉さん、吉田のを四つん這いになって舐めなさい」

「あ……はい」

口から佐々木のモノを出した朋子は、膝をついた正座立ち状態から四つん這いになる。すると、目の前にはズボンのホックなどを外して膨張したモノを露出した吉田の姿があった。

「ほら、僕のも早く舐めて小泉さん」

吉田に促されるまま、佐々木の肉棒を舐めたその涎だらけの口で彼のモノを被う。

「おおおっ」

吉田は嗚咽に似た声を漏らした。

彼女の口の中には、興奮していた彼がすでに少し出していた透明な粘着液が纏わり付いた。

「さて……このスカートの奥のいやらしい貝ピラにぶち込んでやるか」